学生部門

最優秀賞

岡野 元哉
島根大学

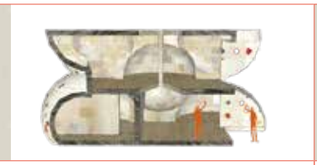
【作品名】
パブリック壁を持つ家

全体図

マチ交流の核になる。

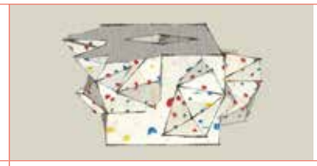
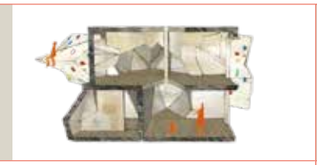
平面図

イメージ図 & 断面図



1.球体壁の家 球体で構成される。球体独特の登る力が求められ、他の壁とは違う楽しさを味わうことができる。

2.多面壁の家 多くの面で構成される。多面のため変化に富み、多くのムーブ(動き)が要求される。

3.バルジ壁の家 壁の角度が変化しているので難しく面白い壁である。筋力・バランス力が求められ、総合力が試される。

4.ルーフ壁の家 180度近く逆さになる。天井壁、トンネル壁とも呼ばれ、重力に逆らう感覚が味わえる。ある程度の保持力と体幹が必要。

5.薄被り壁の家 傾き100〜110度。疲れずに多くのムーブ(動き)ができるため、初心者から上級者まで幅広く楽しめる。

6.どっかぶり壁の家 傾き130度以上。強傾斜になるためある程度の保持力と体幹が必要になる。中・上級者向け。

7.垂壁の家 傾き90度。多くの基本となる壁で初心者でも登りやすく、練習壁として登られる。

8.スラブ壁の家 傾き90度以下。下半身を主に使うため、腕力がない年配者や初心者でも登りやすい。

設計コンセプト

愉しいとは何か?多くの研究が、豊かな人間関係を築くことが人生の愉しさを創ると証明している。ここでは「愉しい=豊かな人間関係」と仮定してみた。近年、住宅を都市近隣とつなげるのは良いとされているが理想論になってしまっている。ただ公共性をもった空間を作っても、そこに人が集まらないからだ。縁側や通り土間など、昔ながらの住宅公共スペースがあっても、そこに人が集まり、交流している姿をあまり見ない。それは、そこに現代に合った人と関わる以外の「目的」がないからだ。人は何かの目的があって集まり、そこに付随的に人との交流が生まれる。昔であればモノや情報であったが、現代ではネットで手に入る。そこで現代に合った目的をもつ住宅を提案する。
ではどのような目的があるか?私は、丹下健三が広島の都市のコア(公共性)に設定したひとつの、スポーツに目を向けてみた。中でも、かつては人を遮り拒む象徴であった壁に多くの人が集まり、交流が生まれているボルダリング壁に着目し、パブリック壁を持つ家を提案する。
ボルダリングは、2020年の東京五輪の新種目としても注目されており、私はあるボルダリングジムを訪れた。そこでは、地域の子どもから会社帰りのサラリーマン、健康のために訪れている老人など、県内外の幅広い層の愛好家が愉しんでいた。ボルダリングという目的のもとに集まり、そこに交流が生まれているのだ。では、このボルダリング壁を用い、目的と交流をもったパブリック壁を住宅に採り入れることはできないだろうか。高さ5mの住宅の外壁に「ホールド」と呼ばれる無数の突起物を作る。ボルダリングの壁種をもとに8種の壁型を形成し、住人はその中から好きな形を選び住み、外壁を他者に開放する。それを集合住宅群とすることで、都市の中心に公共用地を作り出せない日本においての新しい公共性のコアになり、多くの人がそこに集まり豊かな人間関係を形成していくと考える。

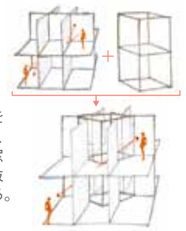
審査委員講評

誰でも思いつきそうでなかなか思いつかないアイデアです。公園や路地空間など街にあるパブリック・スペースの有効活用はよく議論されますがまさか「個人住宅の壁」をパブリック・スペースに見立て、人を呼び込むという仕掛けとは。
このアイデア、東京オリンピックにまだ間に合います。

形態ダイヤグラム

平面計画
外壁を公共に開放するため、開口部はひとつだけとしてプライバシーを守る。

断面計画
どこからでも家族を感じることができ、家族愛を育む。天窓は採光もかね、吹抜で自然換気もかねる。



住宅の許容力

どんなときも住まう人に寄り添い、ストレスがたまったときは運動で発散。他人に会いたくないときは開口部を閉め、天窓から覗く大きな空を愉しむ。疲れたときはくぼみで休み、屋根の上で星を眺め、リフレッシュ。

次の使い手・使い方 〜使い手や時代に合わせて様々に変化する〜

住居

凸凹、大小、○○…8種のなかから家族に合った家を選べる。

民泊・ホテル

政府主導のインバウンド観光客が増加中。こんなホテルがあったら泊まりたいはず。

店舗

大きな開口部と人が集まることを利用して店舗に活用。

居職

住宅部を開放せずに、住みながら働く。インストラクターや用品レンタルとしてボルダリングサービスを提供する。

ボルダリング壁

誰も使わなくなった家は、ただのボルダリング壁に。新しい空き家の使い方となる。